

要旨

沖縄県久高島は琉球民族発祥の地と言われており、長く「神の島」と呼ばれる。本研究の目的は、一つに、琉球王国時代から継承するイラブー(エラブウミヘビ)漁の参与観察をもとに、その呼称の実態が内的にどう変化していったのかを明らかにすることである。またその際、文献でわかった一昔前のイラブー漁との比較を念頭に置いた。さらに、今日増加している何らかの信仰心をもって島を訪れる人々の存在をもって、対外的には聖地としての在り方がどう変化しているのかを推察する。

理論的枠組みとしては環境民俗学に照らし、イラブーと久高島の人々との関りについて整理する。また聖地としての在り方については、オットーが提唱した「ヌミノーゼ」の概念を適用し、観光客が見出す、久高島の人びととは一見異なる「神聖さ」の実態について明らかにしていく。

本稿は序論と結論を含む7章で構成され、2-6章が本編にあたる。

第1章では、3か月間インターンで滞在した時のことを率直に振り返り、「神の島」という呼称と実態が乖離しているのではないかと感じた経験について、誤解のないよう注意を払って説明していく。そのうえで「神の島」の実態を言語化するという研究設問を定めている。筆者は2023年の実に4か月近くを久高島で過ごした。島の人に様々な話を聞かせていただいたことで彼らの胸中や様々な実態について見えてきた。そもそも男性が捕り手の近年のイラブー漁について述べる文献は筆者の調べた限りでは見つかっておらず、それに加え、独自性のある視点で設問を定められたのではないかと自負している。

第2章では環境民俗学の概要を紹介し、久高島の人びととイラブー漁との関係性について当てはめられるものなのかを説明していく。イラブーとは沖縄以南に生息するハブ科のウミヘビのことである。このイラブーを獲る権利は古くは神役の役職手当として久高島の一部の家に琉球王国から与えられたものだ。形態の変化がありながらも、素手で一年のうちで決まった期間の日没後の毎日獲るという伝統を守り、2023年の今も継承している。

第3章では琉球王国時代の久高島を取り囲む状況についてやイラブー漁の始まり・意義などについて説明していく。イラブー漁の捕獲から燻製の流れもここで触れる。

第4章では久高島に主眼をおいてこの島の環境についてさらに詳しく説明する。イラブー漁以外で、神の島のアイデンティティを継承していると感じた日常的な場面を紹介する。

第5章では8月と10月に合わせて1か月近く行った、漁と燻製作業のフィールドワークについて、フィールドノートや写真を用いて具体的に紹介していく。参与観察中や別で行った捕り手へのインタビュー、イラブー漁に関わるいくつかの神事を通し、島の人のイラブー(漁)への敬虔な態度が見えてくる。他方、対岸の本島が夜間にランランときらめいているのを見たのをきっかけに、産業化と伝統の継承について考えた。

第5章では「ヌミノーゼ」の概念を軸に、久高島を現代でも「神の島」たらしめるものは何なのかということを微力ながら考察していく。

400年もの歴史の重層の中で、彼らは今どのような思いでイラブー漁と関り、そして継承していこうとしているのか。本作で紐解いていきたい。